

2015年5月

## グローバル化と歴史意識

浅野良裕

グローバル化と言われるようになってから久しい時が経ちました。海外への留学が減ったり、全般的に日本の国際的な存在感、競争力が低下してきており、政府や企業は**グローバル人材**の育成を掲げて、教育改革やイノベーション創出（技術と市場）等各種の政策を打ち出してきています。

**国際化、グローバル化、スーパーグローバル**等いろいろな言葉が飛び交いますが、必ずしもその意味内容の明確な定義はされていません。**言葉の概念を明確に**しないまま物事を進めていくと、人によってその意味するところ、思っていることが違い（意識的にせよ、無意識的にせよ）具体的な問題が発生したときに、**その違いが表面化**し対立することになります。

**国際化**は international・**国の間、国の際**からも分かるように、国家や民族の外部との関係を意味します。これまで国内だけにおいて同じ民族の人とだけ接触していた人が、国外に出かけたり、国内の外国人と交流する等、自分たちの文化との違いを認識する段階です。貿易、海外旅行等政治、経済、文化等で他国との関係、摩擦も出てきますが、他の国・民族の人たちとの交流により、新しい世界が開けます。

**他の文化、民族との交流**（戦争等も含む）は何千年も前から行われておりましたが、これが世界的に問題となってきたのは、近代化後、国民国家が成立し資本主義が発達し、海外展開・植民地化政策がとられてきた時代からでした。しかしこのころはそれぞれの国家が自国の利益・領有権拡大のために動いてきており、その帰結は2度の世界大戦であり、共産圏の成立、冷戦体制でした。

グローバル化が言われたしたのは、冷戦体制の終結後、資本主義が世界を制覇し**地球規模での世界市場が成立**し、世界が一体的に動き出してきてからです。新自由主義と言われる政策が主流になり、お金・資本が自由に世界の市場を動き回り、物やサービスの貿易自由化も進んで、市場は世界規模となり、そこでの競争に勝ち残ることが企業の生存の条件になってきました。

しかし他方、**民族や宗教、文化の違い、そして国家**は相変わらず残っており、グローバル化の社会は同時に、中東等での宗教、民族紛争、東アジア島での国家間の軋轢等、過去から背負ってきた問題は、表面化してきています。**多様な民族や文化、価値観**の人々がどうすれば平和に共存できるか。その答えは歴史認識も含め簡単ではありません。これは**国際化からグローバル化への転換**の問題と言えましょう。

また気象変動や資源・エネルギー問題、種の絶滅、科学技術の有効性、経済的な格差・貧困等は国家・国際的な視点はもちろん、グローバル・人類的な視点も超えた視点が必要になってきます。**スーパーグローバル、地球を超えた超地球的な視点**です。

問題を発生原因、事の本質から捉え、解決しようとするとき、その発生史、歴史を認識することは不可欠です。個人の歴史においても、家族の歴史においても、企業の歴史においても、民族、国家の歴史においても、人類、生物の歴史においても。